

2 希少種の特別調査

平成23年（2011年）から実施してきた希少種の調査により、市内で生息するトウキョウサンショウウオの推移データや、重要猛禽類の繁殖成功率など、生息状況の最新データ及びチョウの記録について紹介します。

2-1 両生類の特別調査（トウキョウサンショウウオ）と両生類保全活動

トウキョウサンショウウオ（*Hynobius tokyoensis*）は、昭和6年（1931年）に市内で発見された小型サンショウウオで、あきる野の自然環境の代表的な生き物でもあるため、市のイメージキャラクター（森っこサンちゃん）になっています。

トウキョウサンショウウオは、かつて、関東地方に広く分布していましたが、土地利用の変化などの環境悪化により、20世紀後半から生息場所や個体数が激減し、絶滅してしまった場所もあるような状況です。現在では、東京都やあきる野市版のレッドリストでは絶滅危惧Ⅰ類（EN）に、環境省2020レッドリストでは絶滅危惧Ⅱ類（VU）に指定され、里山の代表的な希少種の一つとなっています。



トウキョウサンショウウオの成体と卵のう

2-1-1 トウキョウサンショウウオの産卵調査

平成23年（2011年）から実施しているトウキョウサンショウウオの産卵状況や生息状況の調査で、現在までに絶滅している場所もありますが、約50か所の産卵場所を確認しています。（一部は情報提供によるデータ収集を実施）

令和7年（令和6年度）は、その内37か所で産卵を確認し、卵のう数は、合計1,286個で、例年並みの個数となりましたが、平成31年の2,243個（本調査で確認した最多卵のう数）に比べ、大幅に下回りました。

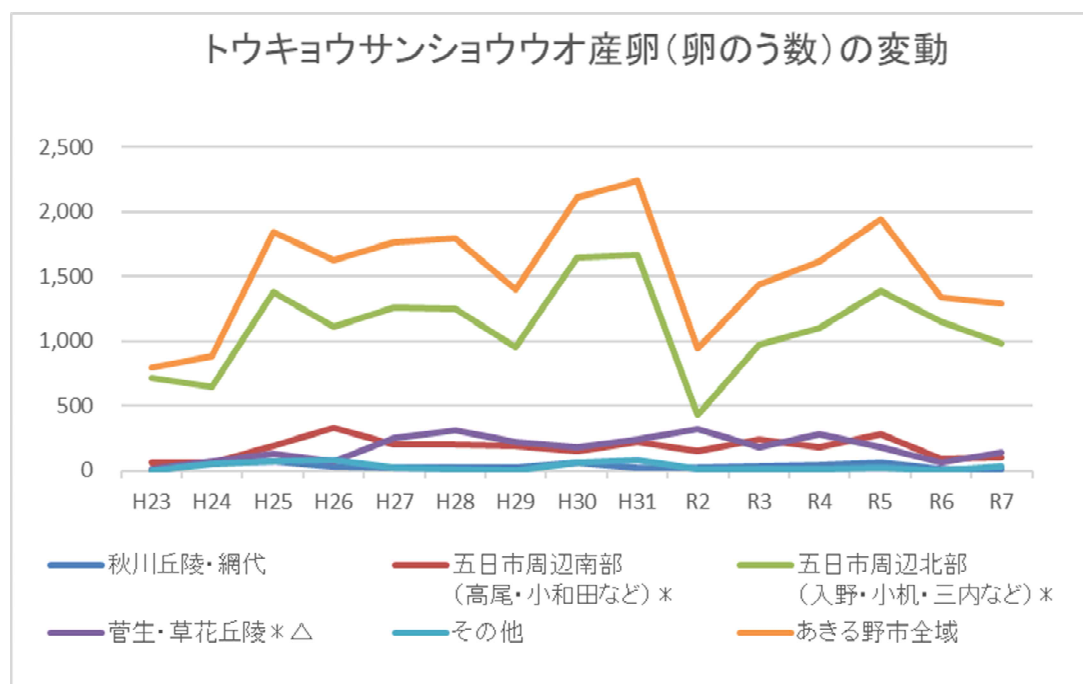
〈トウキョウサンショウウオの産卵（卵のう数）の推移（平成23～令和7年）〉

地区又はエリア	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	H31	R2	R3	R4	R5	R6	R7
秋川丘陵・網代	-	59	78	30	29	25	21	67	27	26	33	45	66	19	18
五日市周辺南部 （高尾・小和田など）＊	64	59	190	333	203	202	195	151	223	155	243	179	281	95	108
五日市周辺北部 （入野・小机・三内など）＊	720	645	1,379	1,109	1,261	1,247	955	1,647	1,668	428	969	1,101	1,388	1,156	984
菅生・草花丘陵＊△	16	75	132	77	249	311	225	181	246	321	181	278	181	65	143
その他	-	51	69	80	22	10	8	64	79	17	10	16	27	5	33
あきる野市全域	800	889	1,848	1,629	1,764	1,795	1,404	2,110	2,243	947	1,436	1,619	1,943	1,340	1,286

＊保全が行われている主な地区又はエリア

△産卵場所の減少が目立つ地区又はエリア

赤字：内部調査、または情報不足の年



調査地点の1/5では、産卵は確認できず、産卵場所の減少を示します。また、多くの地点では個体数の減少が見られる中、産卵場所となる水場の整備や外来種対策などの保全活動が行われている場所以外は特に、個体数の減少により絶滅寸前の状況に追い込まれているようになっています。

引き続き、減少の理由は、捕獲ができなかったアライグマなどの外来種や、サンショウウオの採集問題の影響、さらには、里山の放置や、産卵場所の乾燥化が続いていることが大きな要因と考えられます。その中、近年の、冬～春までの雨量不足により、春を迎える多くの水場は産卵のために必要な水量が満たない状況が目立ちます。

令和7年の春の調査でも、トウキョウサンショウウオの成体や卵のうの外来種による食害や人による採集被害は、少なくとも17か所で確認しており、産卵が見られる場所の半数近くでその被害と疑われる事態を確認しました。

このように様々な減少の要因が混在する中、五日市周辺の一部の産卵場以外の個体群は、深刻な生息状況にあるため、今後は、外来種対策以外にも、森林整備や水場ネットワークなど、今までにない多面的な保全活動が必要となっています。

※謝辞：トウキョウサンショウウオ研究会、西多摩自然フォーラム、小峰ビジターセンター、秋川西衛生組合や市民の多くの方々のご理解とご協力により、情報が寄せられるとともに保全活動も進められています。

2-1-2 両生類などの保全活動について（環境保全と外来種対策）

森林レンジャーあきる野は、希少種や生態系の保全のため、様々な保全活動を行っていますが、自然保護に向けて最も重要とされるのは、自然に対する理解や、関心を深めることです。そのため、市広報や森林レンジャーあきる野新聞などを活用し、自然に関する情報を発信するとともに、環境教育として、コレンジャー活動や学校講座、市内外の方に向けた講演会やイベントでの自然解説などを行っています。（詳しくは「Ⅳ 環境教育事業」参照）

また、トウキョウサンショウウオをはじめとした両生類や水生生物のためのビオトープ（池）作りと生息環境の整備を適切な時期に実施することにより、様々な種類の生き物を存続させることができます。

さらに、生態系に大変な被害をもたらしているアライグマなどの外来種の捕獲や駆除活動も継続して行い、その被害を減らしています。

以下は保全活動などの様子。



外来種捕獲用の罠の様子。



両生類などの産卵場所の整備（池堀り）の様子。



爬虫類・両生類などの生き物のロードキル防止看板の設置。



整備後の両生類などの産卵場所の様子。このような湧水が少なくなっています。

○ アライグマ・ハクビシン捕獲活動（外来種対策）

行政による外来種対策の一環として、平成25年から両生類などの重要な生息場所となる水辺環境などでアライグマやハクビシンなどの捕獲活動を実施しています（生態系保全活動による捕獲）

特にアライグマは、水辺環境の生き物から山中の樹上に住む野鳥などまで、多くの生物に大きな影響を与え、絶滅させてしまうことが報告されているため、アライグマを中心に、ハクビシンやアメリカザリガニ、アカミミガメ、ウシガエル、ガビチョウ、クビアカツヤカミキリ、オオブタクサなど様々な外来種の捕獲や駆除を行っています。

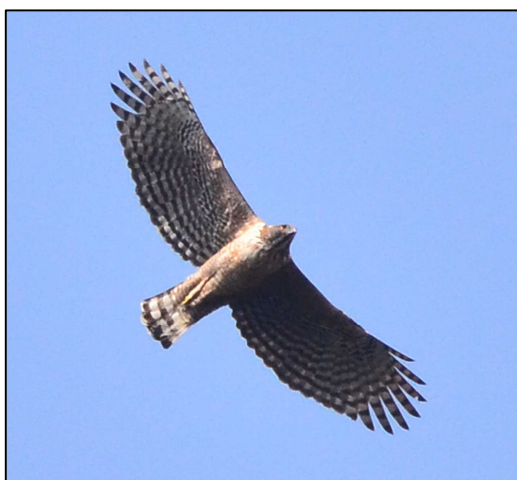
〈アライグマ・ハクビシンの捕獲頭数(森林レンジャーあきる野による生態系保全活動のみ)〉

年度	アライグマ			ハクビシン		
	オス	メス	不明	オス	メス	不明
平成24	1	1	1	—	—	—
平成25	3	3	3	—	—	2
平成26	15	2	—	—	1	—
平成27	10	1	—	3	2	—
平成28	4	2	—	1	—	—
平成29	5	—	—	1	—	—
平成30	3	—	—	—	—	—
令和元	4	1	—	—	—	—
令和2	1	—	—	—	—	—
令和3	4	—	—	—	—	—
令和4	3	1	—	—	—	—
令和5	1	—	—	—	—	—
令和6	1	—	—	—	—	—
少計	55	11	4	5	3	2
合計	70			10		

2-2 猛禽類調査

2-2-1 重要猛禽類の繁殖状況について

アンブレラ種（生息する地域の自然生態系における食物連鎖の頂点の消費者）である猛禽類の重要な種類（クマタカ、ハチクマ、サシバ、オオタカ）は、地域の生態系の保全に重要な役割を持つ存在であるため、引き続き生息状況調査を行うとともに、保全活動を行っています。



クマタカ (*Nisaetus nipalensis*)



サシバ (*Butastur indicus*)



ハチクマ (*Pernis ptilorhynchus*)



オオタカ (*Accipiter gentilis*)

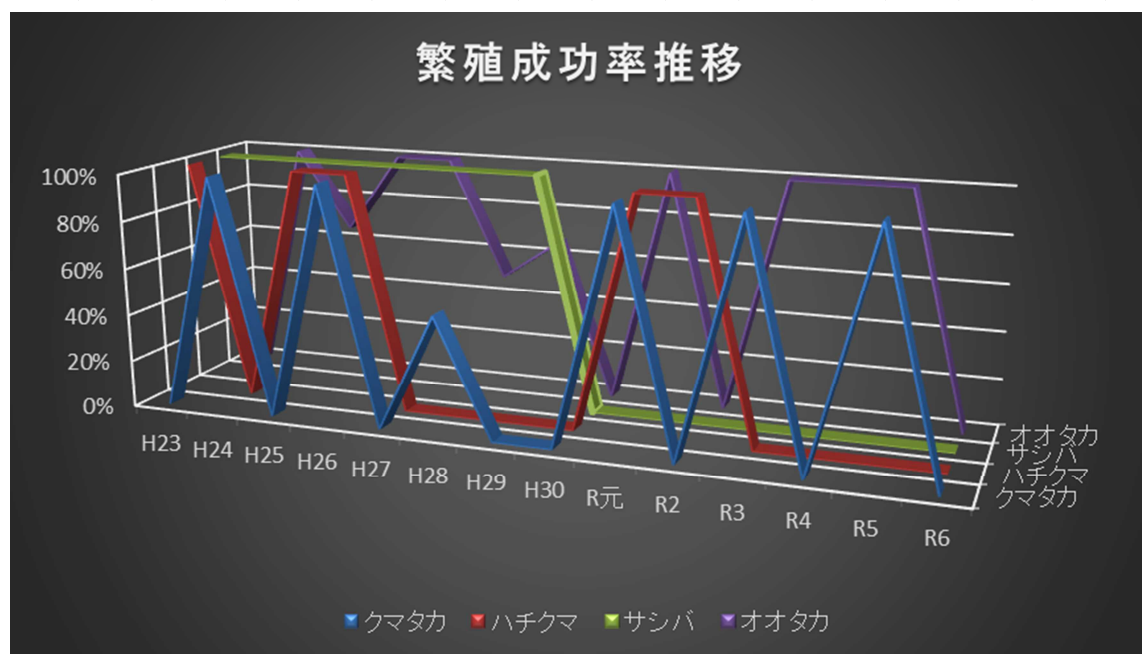
対象の4種の猛禽類の繁殖成功率については、ハチクマ、サシバやオオタカともに、つがいの数が減少し、繁殖成功率の低下が見られます。ハチクマやサシバは渡り鳥で、当地域には初夏に飛来しますが、どちらも令和に入ってから、市内での繁殖が見られなくなりました（ハチクマは令和2年まで）。これら3種類の生息状況の回復は難しくなっています。

クマタカは、近年では、年によって1～2つがいが存在し、ある程度安定な状況にありますが、上記で示したように、豪雨、ニホンジカやナラ枯れの影響を受けているように見受けられるため、今後の繁殖状況は心配されます。

〈あきる野市における重要猛禽類の繁殖成功率推移（繁殖成功巣数／造巣・産卵巣数）〉

市内の繁殖成功率の推移（繁殖成功巣／造巣or産卵巣数）															
種類	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R元	R2	R3	R4	R5	R6	平均
クマタカ	—	100%	—	100%	0%	50%	—	0%	100%	—	100%	—	100%	—	69%
ハチクマ	100%	—	100%	100%	—	—	0%	—	100%	100%	—	—	—	—	83%
サシバ	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	0%	0%	0%	—	—	—	—	70%
オオタカ	ND	100%	67%	100%	100%	50%	67%	0%	100%	0%	100%	100%	100%	0%	68%

※ クマタカは2年置きに繁殖する / 赤字は確定できなかったデータのため、推定数値 / NDは調査なしやデータ不足



繁殖成功率は、市内で造巣、又は産卵（放卵）から雛が巣立ちした時点まで、確認したつがいの数により算出しました。

結果、14年間の全種の繁殖成功率の平均は、60%以上の繁殖成功率を示しており、最大でハチクマの83%、最小でクマタカの68%、やや高い～高い成功率を評価することができます。しかし、近年は引き続き繁殖成功率が低下しており、つがいの数、繁殖成功巣の数や巣立ちする個体数は減少してきたことが分かります。

〈あきる野市の巣の状況（繁殖成功巣数）〉

繁殖成功巣数(放卵巣/巣立ち巣)														
種類(つがい)	H23	H24年	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R元	R2	R3	R4	R5	R6
クマタカ1	—	1	—	1	—	1	—	X*	1	—	1	—	1	—
クマタカ2	—	—	X	—	X*	X*	—	—	—	—	—	—	—	—
クマタカ3	—	—	—	—	—	—	—	—	X	X	—	—	—	—
クマタカ合計	0	1	0	1	0	1	0	0	1	0	1	0	1	0
ハチクマ1	ND	—	1	1	X	—	—	—	1	1	—	—	—	—
ハチクマ2	1	—	—	—	—	—	0	—	—	—	—	—	—	—
ハチクマ合計	1	0	1	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0
サシバ1	1?	1	1	1	1	1	1	0	0	0	—	—	—	—
サシバ2	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
サシバ合計	2?	2	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0
オオタカ1	ND	1	0	—	—	—	0	—	—	—	—	1	1	—
オオタカ2	ND	ND	1	1	1	1	1	0	1	0	1	1	1	0
オオタカ3	ND	ND	1?	1	1	0	1	0	1	X	—	—	1?	—
オオタカ4	ND	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
オオタカ合計	ND	1	2?	2	2	1	2	0	2	0	1	2	3?	0

※ 1（雛の巣立ちあり）、0（産卵はあったが、繁殖失敗）、X（飛来／ペアリングは確認したが、産卵なし（*その内、造巣確定））、—（不在／飛来なし（又は市外））、ND（調査／データなし）

〈市内の雛の巣立ち状況（巣立ち数）〉

雛の巣立ち状況														
種類(つがい)	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R元	R2	R3	R4	R5	R6
クマタカ1	—	1	—	1	—	1	—	X	1	—	1	—	1	—
クマタカ2	—	—	X	—	X	X	—	—	—	—	—	—	—	—
クマタカ3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
クマタカ合計	0	1	0	1	0	1	0	0	1	0	1	0	1	0
ハチクマ1	ND	—	1	不明	X	—	—	—	1	1	—	—	—	—
ハチクマ2	2	—	—	—	—	—	0	—	—	—	—	—	—	—
ハチクマ合計	2	0	1	1~?	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0
サシバ1	ND	不明	1	不明	2	1	2?	0	0	0	—	—	—	—
サシバ2	2?	1?	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
サシバ合計	2?	1~?	1	1~?	2	1	2?	0	0	0	0	0	0	0
オオタカ1	ND	不明	0	—	—	—	0	—	—	—	—	1~?	2	—
オオタカ2	ND	ND	不明	不明	3	3	1	0	1	0	1	2	1~?	0
オオタカ3	ND	ND	1?	4	1?	0	1	0	2	X	—	—	1?	—
オオタカ4	ND	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
オオタカ合計	ND	1~?	1~?	5~?	4?	3	2	0	3	0	1	3~?	3~?	0

※ クマタカの放卵数は1つ、他の種類は複数

市内で確認した猛禽類の繁殖活動や繁殖成功率の低下の原因は、以前にも報告したように、営巣林や重要な行動圏内の環境変化、異常気象、哺乳類などの天敵による影響などの自然要因の他にも、森林伐採や工事、外来種、カメラマンやアウトドアスポーツ、ヘリコプターの飛行などの人為的原因も挙げられます。その中、近年の豪雨、ニホンジカなどの高生息密度やナラ枯れの影響が大幅に目立ってきていることを示したいと思います。

豪雨はもちろん、繁殖活動を揺さぶる重要な原因となります。また、ニホンジカなどの哺乳類の採食圧やナラ枯れについては同様に、ハチクマはコナラなどで営巣するため、直接的に影響が明らかにありますが、他の猛禽類においても、生態系が大きく貧弱している森林面積が拡大しているため、森林環境の悪化に伴い、餌不足などの二次的影響により繁殖成功率をはじめに、生息密度が低下していると思われます。

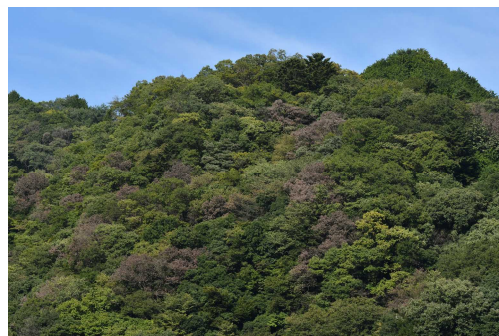
生態系のバランスを保つため、猛禽類の保全は市の自然全体の保全に繋がると考えています。しかし、今後の猛禽類の保全のため、行政や林業関係者などと連携体制をより強化することが大変重要で、今までよりも自然環境の向上を目指す必要があると思われます。

保全の一貫として、本調査の継続や猛禽類の保全のために活動し、環境教育や情報発信なども通じて猛禽類に対する理解を高める効果を期待しています。



【オオタカの旧巢】

あきる野で繁殖するオオタカのつがいの減少により、いくつかの古い巢が残るだけです。利用されないまま、写真の旧巢のように崩れ落ちて行き、最終的にはなくなります。



【ナラ枯れの様子】

ナラ枯れにより、市内の二次林の大部分に急激な変化が起き、多様性の低下が多面的に感じられます。猛禽類も、営巣しなくなるだけでなく、餌不足のため、狩場になることも少なくなりました。



【奥山の守り神】

クマタカは山地の生態系の頂点に立つ重要な猛禽類です。間接的に、ナラ枯れの影響もあると思われ、他の重要な猛禽類と同じく、今後の生息状況が心配されます。



【森林の再生】

森林整備により伐採などは、一時的に森林面積の消失になりますが、今後の生物多様性の発展に繋がります。一方、重要な自然に配慮した計画に沿う形で実施することが求められます。

2-2-2 あきる野市における猛禽類の渡り調査記録について

繁殖と越冬のために、春と秋を中心に野鳥の渡りが行われます。猛禽類は、移動性が低い種類と高い種類はそれぞれで、南下のため集中的に行われるサシバやハチクマなどの秋の渡りは特に有名です。

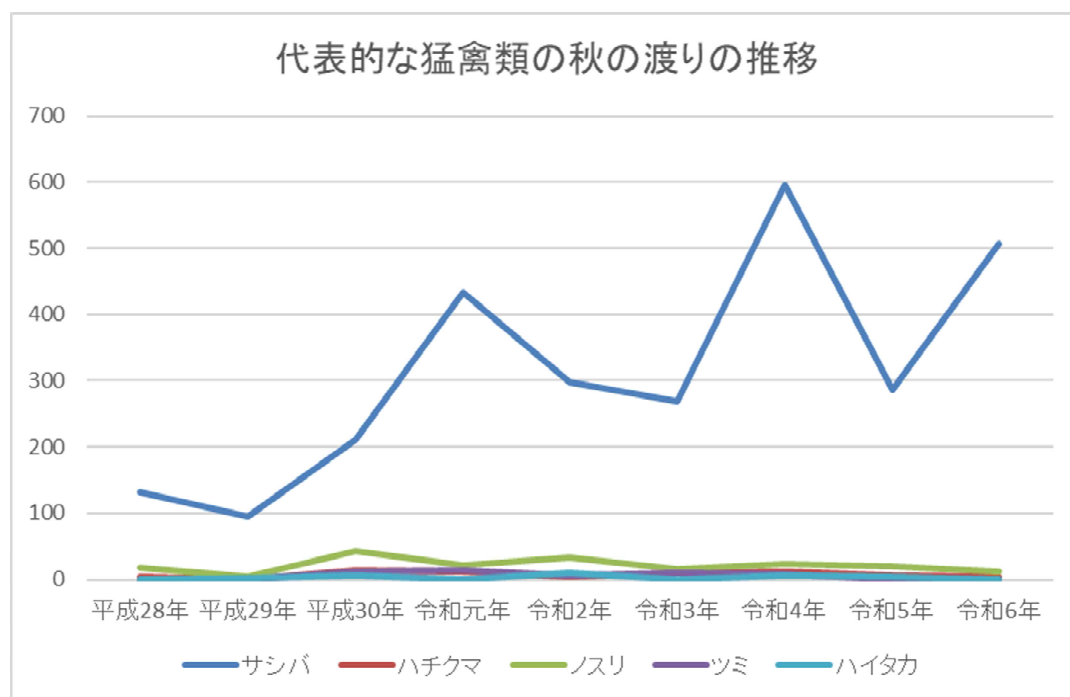
本市においては、関東の重要な秋の渡りルートと重なるため、特にサシバの個体数が多く観察できます。

以下は、記録し始めた平成28年（2016年）から、8月下旬～11月上旬頃に観察した種別での個体数のまとめを紹介したいと思います。上記の重要猛禽類調査とは別の記録になります。

観察日数や時間はレンジャーの様々な活動に合わせて行うため（重要猛禽類調査やハイキングコースの巡視など）、限られていますが、主な渡り期間である9月下旬に力を注いでいます。渡る個体数は、得られた数値の数倍の合計数を想定されており、毎年、青梅での「日本野鳥の会」による観察で得られている個体数と同等か、それ以上であると思われます。また、観察場所は多数で、区別せずに市全域の情報が含まれています。

猛禽類の秋の渡り(平成28年～令和6年)																		
	サシバ	ハチクマ	ノスリ	オオタカ	ツミ	アカハラダカ	ハイタカ	ミサゴ	トビ	クマタカ	チュウヒ	ハイイロチュウヒ	チョウゲンボウ	コチョウゲンボウ	チゴハヤブサ	ハヤブサ	その他	全種合計
平成28年	131	3	17	2	1	0	0	0	2	0	0	0	1	0	0	1	0	158
平成29年	94	0	3	2	1	1	2	1	0	0	0	0	1	0	1	2	3	111
平成30年	210	13	43	7	11	0	6	1	6	0	0	0	1	0	2	3	2	305
令和元年	433	12	21	3	13	0	0	2	3	0	0	0	1	0	1	5	0	494
令和2年	297	4	32	3	5	0	9	2	2	0	0	0	0	0	0	1	4	359
令和3年	269	9	16	4	10	0	1	2	3	0	0	0	0	0	0	2	6	322
令和4年	596	11	24	0	7	0	5	2	2	0	0	0	0	2	0	3	3	655
令和5年	287	5	20	0	1	0	4	1	2	1	0	0	1	0	2	1	7	332
令和6年	506	3	11	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	524

※ 猛禽類の種類は、これまで年間を通して市内で確認した全ての種類（または情報がある種類）ですが、秋の渡りの期間内に当てはまらない種類は0となっています。赤字は、本市において渡りを行う代表の猛禽類です。





【サシバの鷹柱】

あきる野で最も数多く観察される猛禽類であるサシバは、集まって旋回しながら上昇気流に乗っていきます。この現象は渡りのクライマックス。



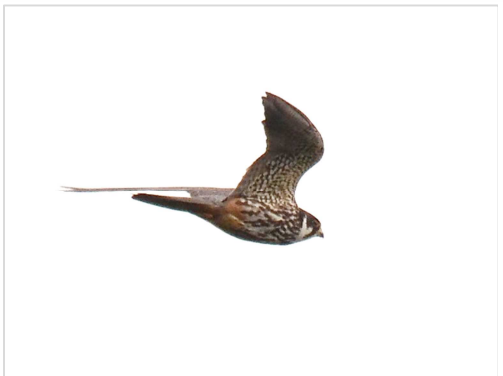
【渡り中のハチクマ】

近年、市内で繁殖が見られなくなっている夏鳥のハチクマですが、渡りの時期に少数の群れや単独で、またはサシバの群れに混じって渡ります。



【渡り中のアカハラダカ】

平成 29 年に、サシバの群れの中に紛れたアカハラダカ。東日本経由でめったに渡らない猛禽類で、今回はおそらく都内での初記録となりました。



【渡り中のチゴハヤブサ】

アカハラダカと同様で、あきる野市周辺で繁殖しない猛禽類であるため、観察できるタイミングは春と秋の渡りの時期に限ります。